

☆練馬区教育委員会教育長賞

『税によって自然環境を支えるために』

練馬区立大泉学園中学校

三学年 木幡 誠

「地球温暖化」、この単語を今までの人生で何回見て、聞いたことがあるのだろうか。

私は幼い頃から自然環境に興味があった。

特に海の生き物が好きで、小学生の時には図鑑を多く読み、好奇心・探求心をくぐらませてきた。そんな人間だった。

だからこそ、同時期私は環境問題に目を向けた。我々の快適な生活により、苦しむ動植物たち。その苦しみによって、地球の自然に歪みが生まれる。そしてその歪みは気候変動に加え、食糧危機となり、私たちにおそいかかってくる。このような内容を見たとき、私は鳥肌が立った。それと同時に大きな使命感が沸き上がり、節電、節水を家族にこころがけるようになった。この小さな出来事から数年が経ち、税の作文をかくことになった私は、この内容と税の関わりを調べることにした。

自然環境と税の関わりを調べると、「森林環境税」、「森林環境譲与税」が出てきた。これらの税は、森林を整える林業に携わる人の減少により、自然環境の保全と地域温暖化防止

に大きな役割をもつ森林の機能が維持できなくなってしまうため、機能維持に必要な財源確保を目的としてきたものである。これらの活用により、森林は保全されていく。

しかし、これだけでは足りないかと私は考えた。ブルーカーボンの可能性を広げるために使用する税をつくってはどうか。まずブルーカーボンとは海藻などの海洋生物が大気中の二酸化炭素を原料とし、光合成によって生み出された炭素化合物を海底に蓄えたもののことを指す。これの素晴らしい所は、人の手の入らない自然の作用によって、多くの二酸化炭素を吸収し、安定した状態で地中に炭素化合物を長期間蓄えられる所である。これらの活用は海洋国であり、人口減少の進む日本という国にとって大きな希望につながるのではないのだろうか。ただし、このブルーカーボンには大きなデメリットもある。それはブルーカーボンという存在が未知数であり、海の酸性化に大きな影響を与えるかもしれないという点だ。海の酸性化は、水に二酸化炭

素のとけた炭酸水が酸性になると同じように海水に二酸化炭素がとけ、酸性になってしまう現象だ。貝の殻がとけるなどの被害が生まれる。これらの問題を研究する科学者にこの税の譲与をするのはどうか。高い技術力の集まるこの国だからこそ、できる取り組みではないのだろうか。

まとめると、ブルーカーボンを支援する税によって、ブルーカーボンの拡大、問題を解決しようとする研究者・団体に税を譲与しようという提案である。金額は森林環境税とうまくバランスをとり、納税者に配慮した金額にすべきと考える。

税は私たちの生活を支え、自然環境をも守る大切なものである。私は社会と科学、両方の視点から物事を見て、最善を判断できる人になりたい。